

## 【分科会9】リカバリーの視点から薬を使いこなす

司会:加藤玲(新宿区精神障害者家族会「新宿フレンズ」)

山梨宗治(NPO法人全国精神障害者ネットワーク協議会事務局長)

小松正泰(川崎市の家族会連合会 あやめ会／家に引きこもりがちな人たちを支援する窓の会)

佐藤光展(読売新聞東京本社医療情報部)

藤井康男(山梨県立北病院院長)

吉尾隆(東邦大学薬学部医療薬学教育センター臨床薬学研究室)

### 【分科会の趣旨】

リカバリーの視点から薬を位置づけるためには、その人の人生の可能性を最大限に広げることが目標となります。

日本における薬物療法の現状は、多剤大量処方がいまだ主流です。そのため、副作用、身体合併症、突然死などの問題が多発しています。

日本でどのような問題がおきているのか。薬を安全に使いこなし、その人の可能性を広げていくためにはどうしたらよいか。各分野のエキスパートとともに、問題を掘り下げていく分科会です。

司会:加藤玲さん(新宿区精神障害者家族会「新宿フレンズ」)

### ○精神医療ユーザーアンケート 1000人の現状・声 2005～2012年全国調査から、当事者の現実を伝える

【報告者】山梨宗治(NPO法人全国精神障害者ネットワーク協議会事務局長)

山梨さんは、毎年、1000人規模の当事者対象の調査を行っています。その調査から明らかになった、「精神科薬とリカバリーの現状」を報告してもらいました。

そのなかで、「薬によってあきらめたこと」「薬による回復への阻害要因」などの調査により、薬の影響で人生のなかであきらめざるをえないことがいろいろ起きてくること、そうした背景として、薬の多剤大量処方に伴う副作用が要因の一つであることなどが報告されました。

### ○家族から見た統合失調症罹患者の異常な死亡率について

【報告者】小松正泰(川崎市の家族会連合会 あやめ会／家に引きこもりがちな人たちを支援する窓の会)

川崎市の260組の家族の追跡調査(平成18～22年)に基づく報告です。

調査によると、一般の人の死亡率に比べ、統合失調症の人たちの死亡率は、異常に高いことが浮き彫りになりました。

総死亡率は一般の20～64歳の統計に比べ**8倍の高さ**、突然死は一般の20～64歳の統計に比べ**28倍の高さ**でした。考えられる要因として、医療環境や生活習慣の問題、社会的問題などが挙げられ、今後の対策の重要性を訴えました。

## ○薬を使いこなす前に考えるべきこと

【報告者】佐藤光展(読売新聞東京本社医療情報部)

精神科の診断は、客観性が求めにくいのだが、誤診があまりにも多いのではないかという問題の提起です。新聞記者として精神科取材するなかで、他科に比べあまりにも閉鎖的であること、誤診が多すぎること薬の処方が危険すぎることなどの警鐘をならす報告でした。

## ○統合失調症患者の死亡リスクと薬物治療

【報告者】藤井康男(山梨県立北病院院長)

統合失調症の患者の死亡リスクは、一般の人に比べ高いことなどをさまざまな統計やデータを元に報告。死因として多く見られる自殺・事故死・虚血性心疾患・致死性不整脈・肺血栓塞栓症・糖尿病性急性合併症などをあげ、それぞれの背景をくわしく分析しました。

## ○薬と安全につきあうためにはどうすればよいか

【報告者】吉尾隆(東邦大学薬学部医療薬学教育センター臨床薬学研究室)

薬剤師として、統合失調症の薬物療法の問題点として「多剤併用大量処方」「抗パーキンソン病薬の高い併用率」「抗不安薬・睡眠薬の高い併用率」を挙げました。また、死亡リスク問題や突然死の原因などにも言及。薬剤師として、薬の安全なつきあい方のコツを伝えました。

《丹羽大輔(NPO法人地域精神保健福祉機構・コンボ)》